

「名詞＋の」にみられる形容詞との意味的類似性

神崎 享子 村田 真樹 井佐原 均

郵政省通信総合研究所 関西先端研究センター

{kanzaki, murata, isahara}@crl.go.jp

1. はじめに

連体修飾要素「名詞＋の」と被修飾語の名詞との関係については、自然言語処理や言語学などの分野で、さまざまな立場で広く考えられている問題の一つである(島津 1986 西山 1993 など)。それは、連体修飾の表現が意味関係を形式の上で顕在化しないため、関係が容易に捉えられないためである(益岡 1994)。「名詞＋の」に関しては、「A の B」という形で A の意味素性と B の意味素性との意味関係を分析するという考え方や、被修飾語の名詞に格を想定し連体修飾側の名詞との関係を分析する考え方などがあり(島津 1986 黒橋 1999)、A と B の意味関係が詳細に分析されている。その一方で、連体修飾要素として「A の」を考えると、形容詞などの他の連体修飾要素との関係が不透明なままであった。「名詞＋の」と形容詞、形容動詞との区別は、何を修飾するかによって、不必要な場合と必要な場合がある¹。本研究では、形容詞や形容動詞と類似性のある「名詞＋の」にどのようなものがあるのか、また、類似性がみられる場合とはどのような場合なのかについて、明確化することを試みる。これ以降、本研究では、形容詞や形容動詞を総称して「形容詞」と呼ぶことにする。

本発表は、研究の枠組みと進捗状況を報告し、現段階で、部分的に若干の考察を加えたものである。

2. 分析方法

2.1 形容詞と類似する「名詞＋の」抽出のための条件

これまで、連体修飾関係にみられる形容詞や連体詞、

「名詞＋の」等の連体修飾要素と被修飾語との意味的な結びつきを分析してきた。主に連体修飾関係を主述関係に直すことが可能か否かを基準に、連体修飾要素と被修飾語の意味関係を分析した(神崎 1997)。連体修飾関係でのみ成立する場合の意味関係の一つとして、連体修飾要素が被修飾語の意味的な実質を表している場合がある(高橋 1994)。つまり、連体修飾要素が被修飾語の概念を具体化したものとして考えられる場合である。例えば、「悲しい思い」の場合、「悲しい」は「思い」の表す概念(以下、＜思い＞と書く)を具体化したものだと考えられる²。この場合、「悲しい」が＜思い＞という意味を内包することになるが、逆にいえば、「悲しい」が＜思い＞という意味を内包していなければ、被修飾語「思い」の内容を表すことができない。たとえば「太郎の思い」となると、「太郎」は＜思い＞という意味を内包していないため、「太郎が抱く思い」という別の解釈になってしまう。

このような特徴から、形容詞と「名詞＋の」が同一の被修飾語と共起して、共にその実質的な内容を表しているれば、形容詞と「名詞＋の」の両者に同一の被修飾語の意味が内包されることになり、そのような例を集めることにより、相互に類似的な性格をもつ形容詞と「名詞＋の」が採取できると考える。

このような観点で作成されるデータを分析し、形容詞と類似する「名詞＋の」を捉えたいと考える。

¹ 例えば「自由な／自由の身」では、両者は同じことをあらわすが、「自由な要求」と「自由の要求」では被修飾語との関係において「自由な」と「自由の」は区別する必要がある。形態が異なるが類義や対義の関係にあるものをまとめて提示しているものとして(村木 1996)がある。

² 関連する研究として(益岡 1994)がある。「X という Y」という表現型は一般に、Y が X の属する範疇を表すという見方を提示している。この説の場合は「X という Y」という表層の表現形式に限られているため、連体修飾要素が形容詞の場合を扱うと、そのまま「～という」の表現形式を適用できないことがある。そのような点では、本研究の扱う範囲は益岡らの扱うものとは異なることになる。

2.2 形容詞と類似する「名詞＋の」の抽出方法

2.1 で述べたような事象を見つけるために、コーパスから事例を取り出した。その手順は以下のようになる。

- 1) 被修飾語の内容を表す場合を取り出すために「～というN」のような表現形式をとる名詞Nを、毎日新聞 94、95 年の二年分のコーパスから計算機で自動的に取り出し、3,770 語の名詞を得た。
- 2) 「(～という) N」をめぐる様々な共起関係の中で、まず 2.1 で述べたような意味的実質を表す形容詞と共起する被修飾語Nを取り出し、次に、そのような被修飾語Nと共起する「名詞＋の」の中から、同様に被修飾語の意味的実質を表しているものを取り出す。この一連の作業は人手で行う。作業の結果、最終的に考察対象にする被修飾語は 77 語となった。

1)と 2)の手順によって、被修飾語Nの意味的な実質を表すとみられる形容詞と「名詞＋の」の語群が、各被修飾語Nとセットになって採取されることになる。

- 3) 取り出された修飾語群のデータをもとに被修飾語をクラスタリングする。

クラスタリングされた被修飾語グループに対して、連体修飾要素側が被修飾語をどのように捉える場合に、形容詞と「名詞＋の」とが類似するかを分析する。このような連体修飾要素の被修飾語の捉え方をここでは「表現領域³」と呼ぶことにする。これらの「表現領域」に基づいて、形容詞と「名詞＋の」の類似性について考察する。

3. 被修飾語のクラスタリング

連体修飾語に基づいて被修飾語を自動的にクラスタリングした。その結果について若干人手修正し、表1の結果を得た。被修飾語のクラスタリングは、各修飾語群に出現する単語の一致度によって行った。

<1>から<17>それぞれの表現領域に分類された形容詞と「名詞＋の」を考察対象とし、形容詞と類似する「名詞＋の」を求めていくことを考えている。現在、本

³ 共起関係が構成する意味を「フィールド(意味の場)」と呼ぶこともある(田中 1978)。

研究は調査段階にあり本稿で総括的な結論を提示することはできないが、一連の作業で得られた結果を一部とりあげて説明する。具体的には表現領域の<1><5><6>の例について説明する。

表1 被修飾語のクラスタリング結果

<1>	立場 領域 次元 観点 見地 背景 側面 面 分野 意味
<2>	枠 枠組み
<3>	域 範囲 間 中
<4>	空気 傾向
<5>	印象 ところ 面 気風 たたずまい
<6>	そぶり 気 思い 気持ち 念 情感 情 色 感覚 感じ 感 気分 様子 ため息 顔
<7>	方 ほど くらい せい どん底
<8>	ため 目 立場 状態 状況 環境下 局面 環境 中 間 形 ところ とき
<9>	流れ 方向 段階 におい 影響 影
<10>	身分 身
<11>	気配 実感
<12>	様相
<13>	意 声 意見 姿勢 意向 目 形
<14>	役割 役目
<15>	間柄
<16>	気象条件
<17>	美しさ

4. 形容詞と「名詞＋の」の類似性

ここに形容詞と「名詞＋の」のデータをすべて載せるわけにはいかないので、分類語彙表の意味項目を利用して特徴的な語例を提示する⁴。

<1> 表現領域：<観点>

被修飾語	立場 領域 次元 観点 見地 背景 側面 面 分野 意味
形容詞	～的な(科学的な 政治的な 経済的な 歴史的な 技術的な 文学的な 法的な 精神的な 否定的な 審美的な) 損な 不平等な アカデミックな ラジカルな

この表現領域における形容詞は、「～的な」という形容詞性接尾辞をとるものが多い。ここに挙げられる形容詞は、「政治的な観点/法的な面」のように、観点や立場など

⁴ 互いに関連性のない語群を分類語彙表の意味項目の番号順に並べ替える手法については、村田(1998)を参照。

を具体的に表現する。そこで、この表現領域を＜観点＞と名づける。形容詞と同様に、観点や立場を具体的に表す「名詞＋の」から、次のような名詞が採取できた。

名詞	助詞
<1.3 人間活動-精神および行為-> ◎非動作性 ～学（医学） ～主義（社会主義） ～研究（比較研究） ～政策（土地政策） ～制度（選挙制度） 感性 芸術 文学 小説 技術 学問 学術 歴史 政治 財政 費用 営業 ～性（安全性）～化（合理化）... ◎動作性 ～改革（行政改革）～保護（生命保護） ～確保（安定確保）警護 育成 利用 消費...	＋ の

「名詞＋の」が観点や立場などを表す場合、名詞としては分類語彙表の分類番号 1.3 の＜人間の活動—精神および行為—＞に分類される語が現れることが多い。上記の名詞群は＜観点＞を表す連体修飾要素として機能するとき、形容詞で表現する事柄と接点をもつ。特に、非動作性名詞群は、比較的自由に「～的な」をつけて形容詞化することができる。

- (1) 政治の立場からみれば、輸出規制の措置は当然とれるだろうし、（毎日）

例(1)にみられる「政治の立場」は、「政治的な立場」と同じ事柄を表すと考えられる。他に、「政治的な」のような一般的な例でなくても、「資金の面→資金的な面」「営業の面→営業的な面」などのように「的な」を用いて「名詞＋の」を形容詞化することができる。

一方、動作性名詞の場合には、形容詞化がしにくい。しかし、動作よりも事柄として動作性名詞が捉えられているため、「行政改革的な面では～」のような言い方は不可能なわけではない。

<5>表現領域：＜性質＞

被修飾語	印象 ところ 面 気風 たたずまい
形容詞	クールな スポーティーな 移り気な 楽天的な 強気な 勝ち気な 控えめな 誠実な 尊大な 口下手な 慎重な 活発な 素朴な 正直な わがままな どん欲な 無鉄砲な 明朗な 陽気な 懐疑的な 壮麗な 地味な

ここに挙げられる形容詞は、「活発な印象／陽気な面／わがままな気風」など、性質を具体的に表現している。そこでこの場合の表現領域を＜性質＞と呼ぶことにする。この表現領域に出現する「名詞＋の」を見ると、次のような名詞が得られる。

名詞	助詞
<1.3 人間活動-精神および行為-> ～風（活動家風） 苦戦 弱腰 本音 常識はずれ 一本気 意地っぱり 高慢ちき 反骨 実質重視 質実剛健 <1.1 抽象的關係> 官僚主導 独立 独立独歩 <その他> 英雄豪傑 男性優位 正反対	＋ の

上表の名詞は、分類語彙表の意味項目でみると、<1.3 人間活動-精神および行為->に出現する語が最も多い。次に<1.1 抽象的關係>である。「名詞＋の」においても、形容詞と同様に、性質や特性を表す語が多く出現している。動作性名詞では、「独立の気風」などのような連体修飾関係がみられる。ここで興味深いことは、単独で「独立」という名詞をみるとサ変名詞であり動作性の性格が強いが、「気風」に連体修飾要素としてかかると「独立」が特質として捉えられることである。

<6>表現領域：＜感情＞

被修飾語	そぶり 気 思い 気持ち 念 情 感情 色 感覚 感じ 感 気分 様子 ため息 顔
形容詞	あわれな いじらしい みじめな 快い 意外な 気の毒な 幸せな 残念な いとおしい 愉快な 切ない 不安な 悲痛な 嬉しい ありがたい 滑稽な 悲しい 安心な 誇らしい 情けない 理不尽な ...

ここに挙げられる形容詞は、感情を具体的に表しているものである。この表現領域を＜感情＞とよぶことにして、ここに出現する「名詞＋の」について見ると、次のようになる。

名詞	助詞
<1.3 人間活動-精神および行為-> ◎非動作性 苦痛 悲しみ 安堵 焦り 親しみ 憎悪 尊敬 尊重 我慢 後悔 祈り 懷疑 歓喜 落胆 恐怖 郷愁 信頼 惜別 満足 妬み 憧れ... ◎動作性 自己保身 見舞い 歓迎 固辞 称賛 批判 <1.1 抽象的關係> ◎非動作 意外 感無量 まずまず 無念 無欲 緊張 ◎動作 飛躍	+ の

この<感情>という表現領域では、感情をあらわす名詞が圧倒的に多いが、表では動作性名詞も出現している。実は、動作性名詞は、「自己保身の気持ち／批判の気持ち」のように感情をあらわす被修飾語と結びつく、意志のような積極的な感情を表現する。<感情>の表現領域の被修飾語群には含めていないが、同じ精神面を表す「意志」と共起する形容詞をみると、意志の強さの程度を表しており意志の内容を具体的に表すということはない。「意志」を連体修飾する場合は、形容詞と「名詞＋の」との間に役割分担がある。これを逆にいえば、「感じ」「感」「気」のような感覚の意味に近い被修飾語には、動作性名詞は共起しないことがわかる。上表の<感情>を表す表現領域に動作性名詞が出現しているのは、感覚や情的な面と意志的な面と両方の表現をとることのできる「思い」や「気持ち」がここに含まれているためである。上表において、動作性名詞は「思い」などと共起して積極的な意志を表し、非動作性名詞は情や感覚の内容を表している。

5. まとめと展望

本研究では、連体修飾要素に意味の実質がある場合に注目して、同じ連体修飾要素である形容詞と「名詞＋の」との類似性について、一部の現象を提示した。本研究の立場は、「名詞＋の」を名詞と助詞「の」に分解して扱うのではなく、「名詞＋の」という一まとまりの連体修飾要素として扱う。「名詞＋の」と形容詞が接点をもつ場合を分析するため、被修飾語との関係から導かれる<観点>

<性質><感情>という表現領域を設定した。これらのような表現領域が、連体修飾要素の形容詞と「名詞＋の」の表現を特徴づける。たとえば、連体修飾要素の名詞が動作性名詞であっても、<表現領域>によっては動作性が弱まり別の捉えかたをする場合が観察された(例：表現領域<5>の「独立の気風」)。

同一語幹で形容詞、「名詞＋の」の両方の語形がある場合には両者の類似点と相違点を分析しやすいが、必ずしも同一語幹のものだけが意味的に類似しているとは限らない。また同一語幹のものでも、いつでも意味が同じだとは限らない。このような問題点を考えると、連体修飾要素間の意味の役割分担と共通性を明確にすることは、連体修飾要素の整理という意味でも大事な課題であろう。

参考文献

- CD-毎日新聞 `94 `95 毎日新聞社 (日外アソシエーツ)
島津明 内藤昭三 野村浩郷(1986)「助詞「の」が結ぶ名詞の意味関係の解析」『計量国語学 15-7』
西山祐司(1993)「NP1 の NP2 と “NP 2 of NP1”」『日本語学 12-10』
益岡隆志(1994)「名詞修飾節の接続形式—内容節を中心に—」田窪 行則 編『日本語の名詞修飾表現』くろしお出版
黒橋禎夫 酒井康行(1999)「国語辞典を用いた名詞句「A の B」の意味解析」情報処理学会研究報告 98-NL-129
村木新次郎(1996)「意味と品詞分類」『解釈と鑑賞 特集 品詞とは何か 61-1』至文堂
神崎享子(1997)「連体修飾関係を結ぶ形容詞類と名詞」『計量国語学 21-2』
高橋太郎(1994)『動詞の研究 動詞の動詞らしさの発展と消失』むぎ書房
田中章夫(1978)『国語語彙論』明治書院
村田真樹 神崎享子 内元清貴 馬青 井佐原均(1999)「意味ソート msort - 意味的並べかえ手法による辞書の構築例とタグつきコーパスの作成例と情報提示システム例」情報処理学会研究報告 98-NL-130